

貞長は、駿河國の住人。狩野公貞長なり。狩野。入江。神原等。當時親王之の御方たり。爲定卿。爲世卿の嫡孫。爲道朝臣の子なり。諸家大系圖第六。爲定。本名爲孝。正二位。民部卿。權大納言。治承五年二月二日薨。年五十二。この富士の御歌。は、似たるあり。明和元年米轉せし。琉球國讀谷山の王子。朝恒この方のことが歌ある和歌。十あまり四うたのひも。このひものひも。雪の白妙。此の歌。當時の人口に膾炙せられた。西村白鳥軒が煙霞齋談三又越谷吾山が朱紫一本載せたり。またれども。明和元年琉球人の歌とのみあるして。その姓名を遂せり。その中。中良守の琉球歌。は。被十四うたを悉く載せて。その姓名をたしる。よ出だせり。他本も比較れぬ。は。おん心ざま忠よしして。文武の本長給へども。世に傳ふるもの稀なれば。おん諱だも親王なり。おん心ざま忠よしして。文武の本長給へども。世に傳ふるもの稀なれば。おん諱だも俗より知られぬ。琉球人のよめる歌の。人口に膾炙して。當時筆に載せるもの多あり。耳を貴び目を翫むる。俗の習といふ物から。それ將幸と幸なきのみ。いとものしことなれども。この君よのみあらざりけり。殿村安守三余よいへるとあり。新葉集を閉し侍る。彼新田楠の。大忠大義のみならず。歌さへよみたる。よ。などてこれらを入れられざりし。北朝なる新拾遺集の。尊氏卿父子の歌。その餘の武士の歌さへ入れり。南朝の上達部の。武士をい敷よもせざりし。歌。義貞朝臣。正行ぬしを。彼勅撰漏らされし。このろ得がたし。と咬きよき。げよおむむさある言なりし。拾芥鈔上を考ふる。よ。新拾遺集を撰まれし。貞治二年北朝後先三月十一日。武家より行忠三位をもて。論旨を撰者爲明へ送るといへり。毎事よかくの如く。足利家の沙汰なりければ。武士の歌の多かるも。おのづのらなる威徳なるべし。又南朝のこれと異なり。彼勅撰漏らされたる。事のこころをよくも志

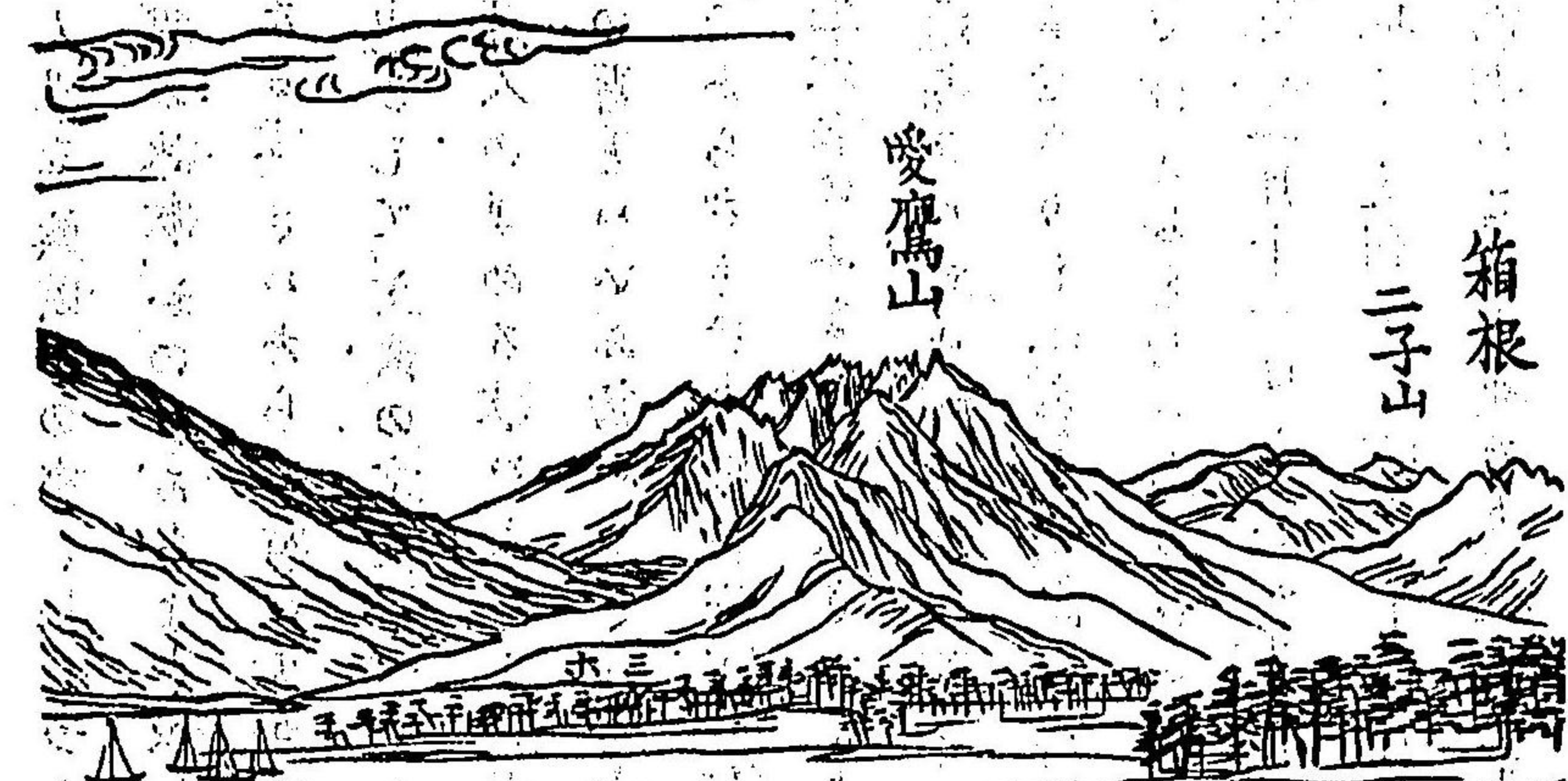
なし。件の富士のおん歌を。興國中の事と推しつもありて。明和改元の年まで。世の相去ること四百五十六十年。彼我の歌歌。おのづのらよく似たるの奇といふべし。琉球の王子朝恒の。李花集を見てよみたる歌。さうあらうて暗合なるべし。そのとまれかくもあれ。まこと宗長親王の。おん心ざま忠よしして。文武の本長給へども。世に傳ふるもの稀なれば。おん諱だも俗より知られぬ。琉球人のよめる歌の。人口に膾炙して。當時筆に載せるもの多あり。耳を貴び目を翫むる。俗の習といふ物から。それ將幸と幸なきのみ。いとものしことなれども。この君よのみあらざりけり。殿村安守三余よいへるとあり。新葉集を閉し侍る。彼新田楠の。大忠大義のみならず。歌さへよみたる。よ。などてこれらを入れられざりし。北朝なる新拾遺集の。尊氏卿父子の歌。その餘の武士の歌さへ入れり。南朝の上達部の。武士をい敷よもせざりし。歌。義貞朝臣。正行ぬしを。彼勅撰漏らされし。このろ得がたし。と咬きよき。げよおむむさある言なりし。拾芥鈔上を考ふる。よ。新拾遺集を撰まれし。貞治二年北朝後先三月十一日。武家より行忠三位をもて。論旨を撰者爲明へ送るといへり。毎事よかくの如く。足利家の沙汰なりければ。武士の歌の多かるも。おのづのらなる威徳なるべし。又南朝のこれと異なり。彼勅撰漏らされたる。事のこころをよくも志

大同歌会上集

龍華寺庭前

望嶽圖 真馬

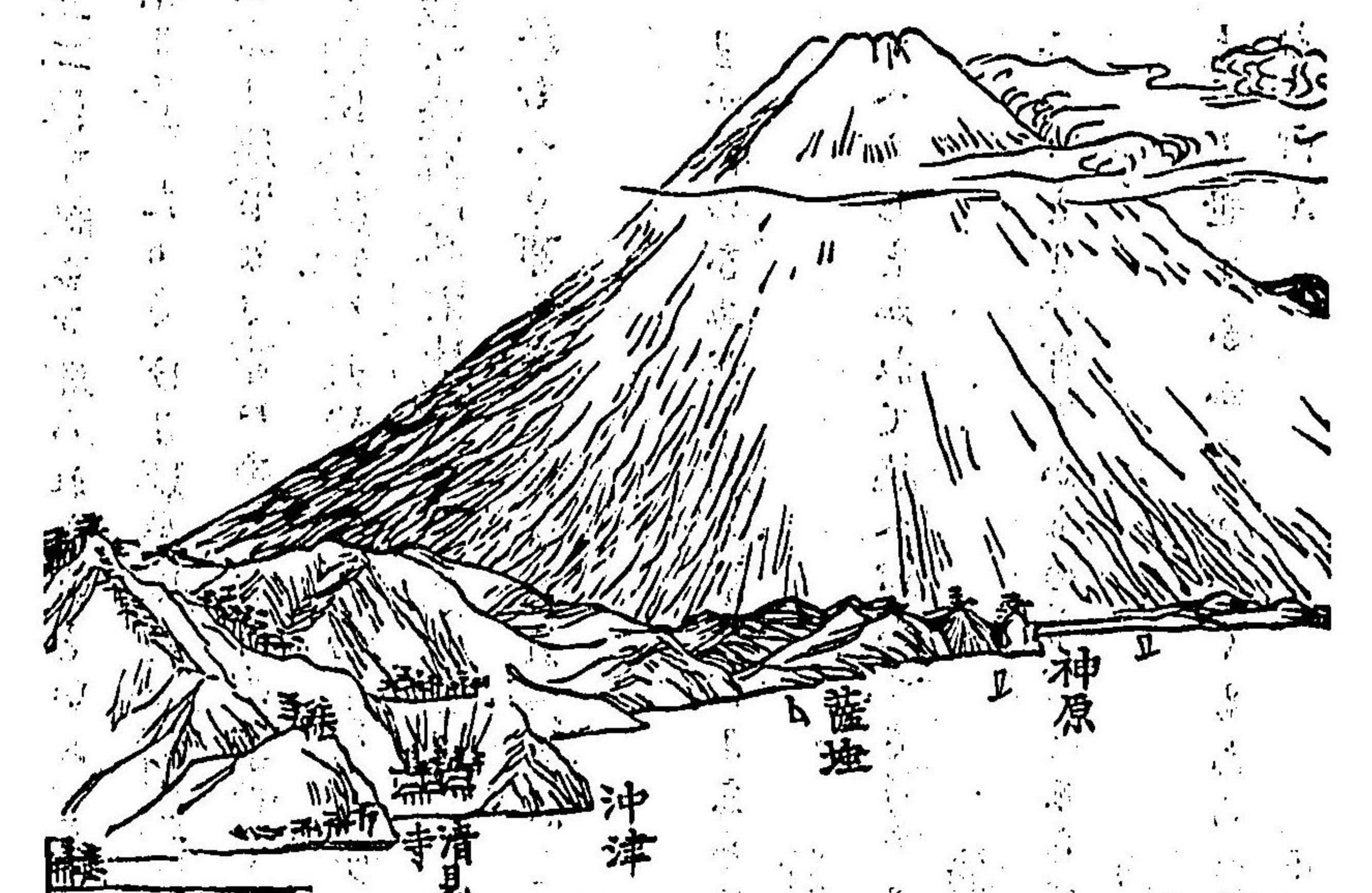
此山は龍華寺の庭前にありて、
 昔より名勝なり。其の山頂に
 龍華寺ありて、其の寺の
 庭前に此山ありて、其の
 山頂に龍華寺ありて、其の
 庭前に此山ありて、其の
 山頂に龍華寺ありて、其の
 庭前に此山ありて、其の



箱根
二子山

四十六

此山は龍華寺の庭前にありて、
 昔より名勝なり。其の山頂に
 龍華寺ありて、其の
 庭前に此山ありて、其の
 山頂に龍華寺ありて、其の
 庭前に此山ありて、其の
 山頂に龍華寺ありて、其の
 庭前に此山ありて、其の



古同故書上集

四十七

らねど。新田殿の正二位中納言を贈られたりといふ。この事江田系圖に載せたるを見たりとて。亡友秀實余に告げたりき。げに脇屋殿の興國二年。從三位刑部卿たり。且楠公に贈官あれど。新田殿に贈官なき事あらじ。その事世に傳ふるもの稀にして。人あらざるのみ。一書に貞方朝臣義隆朝臣。天授三年。從四位下左少將。義隆朝臣義隆朝臣。天授三年。從四位下陸奥守。右少將たるよしを載せたり。祖孫の榮爵かくの如し。武臣の詩歌に譽ある。羨むべき事あらむ。さされ漏されしに遺恨の事なり。彼人々のよみたりしなり。

太平記一

こが袖のみみだに宿る影とだまらうて雲井の月やをむらん

新田左中將

同書六

かへらじとかねて思へばあつさうなき數に入る名をどとむる

楠正行朝臣

同書一十

ふるさと今宵をかりの命どとあらうてや人のそれをまつらん

菊池入道寂阿

吉野拾遺一

とても世はあからふくもあらぬ身のかりのちざりをいので

正行朝臣

安守の機軸のこれらの歌をいふ歌。この他世に傳はらざるも多かるべし

附けていふ。大約士族の眺望。駿河國有渡郡。龍華寺の庭より觀るを。最一とをへし。この事。先板雨談よりいふ。さうりけれども。東海道を往還するもの。その間道に入るを厭ひて。猶觀るもの多かるべし。よりてその圖をこゝに出しつ。されも亦珍しげなるもの。はれども。その編が。その歌の等類をいふ。それを地理の部に置くもの。その類は從者のみ。よりたともかよ書物を添へたり。もの。一巻に畫せりといふ。

江戸古圖略説

世のありたる江戸畫圖也。長祿長享よりするものなむ。そのれども板二本。こゝろ得がたき事なるはあらむ。昔鎌倉管領及北條氏の時。城邑の畫圖ありて。今の世に遺られん。或藏のうらやま。ハ王寺。忍持附等。その他をほあり。何ぞ江戸のみ一本傳りて。他は一本も遺らざる。是疑ふべきの一なり。梅龍園王入る亦云。板長祿の江戸畫圖を見る。す。守邊村と石濱村の間。會下といふあり。會下といふ寺院たはある。是疑ふべきの二なり。願所の好事者。此條分限帳などより取りよせ。後よ作れるもの歟といへり。あるれども。据るところなきものあり。若く温故の一助とすべし。又近ごろ元和の江戸畫圖出づと

いふ。これいまだその果否を知らず。古印本の。寛永の一張のみ。これも多くの寫本よし。當初の刻本の稀なり。元和寛永よりあなたの物の。見るよしなしと思ひつる。ある人の藏幸。慶長中の江戸畫圖あり。更一梅龍園主人。巨細一攷證して。件の地圖を。慶長十四年の物とす。その辨論。竟一巻をなして。縮圖を巻の端一載せ。命て慶長江戸圖考といふ。余幸に閱することを得て。圖説の精細なるをえり。凡圖中一在るところ。今の什が二三。一だも過ぎき。その街坊のごとき。就中につかよして。一も町名を唱ふる者なく。御橋の名も識さざる多かり。是を寛永中の江戸圖は比校れ。更一簡古といふべし。且その考證するところ。北條分限帳。開闢略記。慶長記。見聞集。この他得がたき舊記多かり。この書もし世に出でな。大江戸の古圖てふもの。あへて一巻一盡せりといふ。附けていふ。今俗。日本橋以西。四谷。青山。市谷。北の小石川。本郷を。まへて山の手といふ。物より山壇と書きたるもあり。按るる。やまのてり山里たるべし。里字よての訓あり。萬里小路を。まてのこりぢと讀まざるが如し。山城の井堤。又井手。或は堰堤。作る。これも井里なるべし。或問。大手搦手の手。いふ。答へて云。別の義なし。宋以米陣隊といふ。鎗手。手の手の如し。

第十一地理

武藏太田註

武藏國埼玉郡川口村。舊名太田の註といひけり。梅松論。武藏太田註を。小山常大北よあて行わ。といふ。この處なり。白石翁の撰める一書。永享記を引きて。備中守資清法名。武州郡築郡。太田郷の地頭なり。といふ事見えたり。その郷を名告ること云々。又云。太田の郷。埼玉郡あり。郡築郡あり。あらむ。不審といへり。太田郷を。郡築の郷とせしむ。宋史記の作者。繪記の失なるべし。余が通家。真中氏。彼郷の舊家として。猪俣太が後なりといふ。その口碑。傳ふるよしを聞く。高倉院の治承四年。五月廿六日。宇治川の軍破れて。三位頼政入道父子。平等院にて自刃し給ひしとき。猪俣太の速江あり。老後本國へ退隱せしむるべし。速江は幾兵のよしを傳へ聞きて。走せて京へ赴く折。三河路よて。下河邊藤三郎が。三位入道の首は俱して。下總へとて落ちて采つる。逢ひけり。こゝよて。猪俣太。主家の凶音を聞きて。遺恨。堪へられぬもまへなし。せめて和殿もろ共。主のまん首。俱し奉り。墳墓せん處をも。見果侍らんといふ。藤三郎聞きて。は。速江のなは。藤三郎のなは。近かり。誇給へ。打たつれ立ちて。下總へ落ちて行はけり。かくて頼政公の首を。下總の猿島なる。古河の里。埋葬つ。俣太。其處よて。頭顱を刺りまらぬ。塚のほとり。一巻を締む。仁君の菩提を弔ひぬ。是年八月。前

武術水曾冠者。東北に起りつ。合戦年を兼ねて。平家也。西海の波濤に沈没し。源氏一統の世となりしけれども。平太入道の。菅里へ入ることを思ひ。終に古河にて身まかりけり。平太が妻子も。其處に集合て。子孫真中村古河を去ること一里許あり。今の今より。これ真中氏の祖なり。是よりすあまりの世を累ねし也。頼政卿の曾孫。左衛門の尉國綱ぬしの後たる武士。源氏。武藏國埼玉郡。太田荘の地頭たるより。菅原あきつらや。真中氏も。太田の荘に移住してけり。子孫今をば被處に在り。世村正たり。皆實子にして綱さぬといふ。この事。祖父神興寺。字左仲。法名淨願。寛曆十年。庚辰十二月十九日下世。年六十一。の物語なりとて。その家の口碑に傳ふる所と吻合す。按る日。猪。平太の。右大臣藤原武智麻呂の後裔。遠江權守爲憲が末業。同國の柱人。井氏の族たり。平家物語の段。源平盛衰記三位入道。國谷判官。源平盛衰記の段。参考。太平記。國谷判官の段。等。載せる所。猪。平太。参考。猪。早太平家。早太。源氏とのみなるして。實名傳えらる。家記より。守資。或は資直に作る。然るや否や。是ららる。凡軍記に載せたる。頼政卿怪鳥を射る一段のみ。守治川の戦。かの人の事見えされ。事迹の考ふべきものなし。然れども。その口碑に傳ふる所。由なきはあらざ。治承四年五月下旬。三位入道自敏の趣を考ふる。長門本平家物語守治河合の段。一。去。さて三位入道渡邊の丁七となふを呼びて首をうてといふ。主の生首討たん事。流石よかこゆく覺えて。

御自害おもひとて。太刀をさしやりければ。入道太刀を抜き。いづの守殿仲。御自害をい。御自害をい。をむくむ。これ後代の物語にてあらんを。是を本日を給へとて。念佛百へんむ。奉り車上り。太刀の先を腹にあて。倒れかたりて死しけり。その後下總國の住人。下河邊藤三郎。よりて御首を取り。直垂の袖に包みて。板敷の上板を。つぎ破りてかくしてけり。いづの守これを見て。因幡國の住人。彌太郎も。兼といふものを召して。その首をば。入道殿の首と。一處におけて云々。平等院のましろ戸のかべ板をねちて投げ入れけり。人これを去らざ。後日血の流れ出でたるを見て。あべを打ち放ちて見れば。死入の首一つあり。いづの守なり。叔こそ死がいの門とて。今もあり。又云。宗徒のものども。自害し。落つべきものども。落しけり。下河邊のものども。數多ありけるも。いづの守の方。伊豆國の住人。上藤四郎。五郎とて。兄弟ありけるも。落ちしけり。源平盛衰記守治河合の段。一。亦云。頼政ノ郎黨。下總國ノ住人。下河邊藤三清恒。右頼政ノ首ヲバ。下河邊藤三郎。平等院ノ後ノ戸ノ。板敷。下ノ壁ヲツキ破テ隠シ入ル。又仲綱ノ首ヲバ。因幡國ノ住人。彌太郎盛兼。播キ落シテ。入道ノ首ト一處ニ隠シオク。人不知之。後日。竹格子ノ下ヨリ。血ノ流レ出テタリケルヲ。怪ミテ。御堂ヲ開キ見レバ。頸モナキ死入アリ。誰ト云フコトヲ不知。後ニヨソ。伊豆守トモ

披露シケレ。ソレヨリシテ。自害ノ間トモ申シ、也。今此彼を參へ考ふる。源三位入道の首を。下河邊藤三郎が。板敷の下の壁を突破りて。よくし入る。やうにして納れを。竊し抱きて落ちたるなるべし。長門本平家物語より。後日、仲綱朝臣の首。出でたるよしをいへり。又源平盛衰記より。従ふとき。父子共。首を出でざりしなり。參考平治物語卷二上。朝野群載。一云。頼政が郎等。下總國人住人。下河邊藤三郎行吉。參考云。按。藤三郎行吉。藤三郎行吉。或作行政。行光子。相模國住人。山内須藤龍口俊綱が首。骨ヲ射テレテ。馬ヨリ落チントシケレバ。云々。かゝれば下河邊行吉盛衰記。作。清恒。。頼政卿の御内にて。ありたる剛兵なり。竊し主の首を抱きて。戰場を落ちたる事。疑ふべからず。又猪俣太。宇治河の一戦。得あり。途。下河邊。逢へるより。共。下總へ走りしかば。當時人の。まゐるよしなく。物より記さざりける。又按むる。頼政怪鳥を射つる事。平家物語の段より。仁平の比。近衛帝御在位の時とす。又十訓抄卷十。可。無。幾。能。一。一。。高倉院の御宇として。猪早太の事なし。源平盛衰記六。一。。平治二年の夏。二條院御惱の時の事とす。同書。異説を擧げて。仁安元年。高倉院。尚春宮にておこしましける。御即位あるべきよし。その沙汰有りながら。同年の四月より。御惱おこしまし。時の事ともいへり。本太平記一。一。。近衛院の御時とのみ記して。年號を掲げ。亦猪早太の事なし。この琵琶法師が。かたりつるよしなれば。はじめを略して。終を詳しせり。絶語を言とすればなり。諸説の銜盾かくの如し。故より定のならぬ事。や。そのとまかぐまれ。おれらの事。頼政卿。なほ。か。り。時。こと。あれ。猪俣太。この夜。頼政卿。扈從せしものなり。平家物語性馬の段。。頼政。たのみ切りたる郎黨。速江國の住人。猪早太。ほろの風切たる矢を負せて。只一人。道具したりける。源平盛衰記三位入道。頼政の段。。頼政云々。郎等。二。十七。唱。速江國住人。早太ト云フ者。二人ヲ相具シタリ。唱ハ云々。か。れ。猪早太。頼政卿。一。二。と頼まれたる郎黨なり。ある。この。邊。臣。宇治の戦。あ。と。ざ。り。し。い。ふ。か。し。もし主の頼政卿。年のまじたるを。の。こ。なら。治承の比。八十あまり。も。や。なり。ぬ。からん。さら。猪早太。病死して。彼軍。い。え。あ。も。を。その。子。守。資。或。資。直。など。い。ふ。の。當時。速江。を。り。主君。義。兵。を。起。す。と。聞。きて。都。路。き。して。赴。く。を。り。途。下。河。邊。行。吉。逢。ひ。し。け。れ。共。主。の。首。を。守。り。て。下。總。へ。走。れる。よ。い。あ。ら。さ。る。軍。記。載。す。る。所。詳。な。ら。ぬ。家。説。も。亦。定。か。なら。ぬ。只。推。量。の。外。を。出。で。せ。この。人。の。う。へ。なら。ぬ。祖父。の。里。の。事。な。れ。年。米。書。ど。も。あ。さ。る。物。から。年。月。悠。遠。し。て。考。据。由。なし。さ。ば。れ。頼。政。卿。の。首。を。古。河。埋。葬。たり。とい。ふ。事。違。は。さ。る。よ。や。松。田。一。樂。が。武。者。物。語。云。ある。侍。の。物。語。曰。

河は埋葬たりといふ事違はざるよや。松田一樂が武者物語云。ある侍の物語曰。

源三位入道頼政。宇治の平等院にて自害の時。郎等に向ひて曰。吾白骨を。平等院にまきむべし。頭陀を入れ。汝首にかけて。諸國を修行をべし。吾とまらんとおもふ所にて。瑞相あるべし。其所は白骨を納むべしと有りて。自害とげ給ふ。其ごとくかの郎等。白骨を首よりけ。諸國をめぐる。おのり下總國古河といふ所に着きたり。とある。芝原は。頭陀をかろし。まじし休息して。扱立ちあがり。頭陀を取りて。首よかけんとしけれども。づたあがらむ。郎等ふしぎの思をなし。さらば爰は骨をまきめんと思ひ。在所の人をかたらひ。古河村の近所は白骨を納め。其所にの郎等も庵をむすび。おこなひをままして。其所にて死したりしとなり。今に於て。古河は頼政塚あり。今に古河の城内なる。彼塚のある所を。頼政曲輪といふなり。この書小説に傳ると雖も。かの家説と暗合せり。只その郎等の姓名を識ざるを遺憾とするのみ

第十二地理 町坊舎

或余に町坊舎の三義を問ひけり。余云。町段のこと。東屋の兼燭譚卷之二第廿二則十三則よりいへり。まかるは彼書より。大寶令。及左傳。公羊傳。説文。孟子。字彙。宋。謝察微。算經等を引きて。町里の里數をのみ辨じたり。これらに足下もまれるなるべし。古人考へおさなることを。今又

いふんは事ふりたり。然るながら。足下の問はこれと異なり。町の邑里街坊の義は。わらざ。さるを街坊の名とせしむ。誤なりと思ふれど。その字義のみか。つらひて。古人の説。字を収めて。使ふといふを。よく思ひぬる故なるべし。坊町とも。和名まじりなり。清原紀。十町をよこころ。又安國記。町をとこと訓り。今俗は。町とこととた。フぬる。あといふ。是なり。この外。多くさる訓を見せ。坊は東宮坊のとき。つかさと訓めり。後々の坊官。僧坊の坊のみ習ふるごとくなりしかや。坊をば音よ呼び来れり。故に街坊の坊なるをも。町の和名まじりなれば。假りて町字を用ひたり。あかれども猶まじり習へて。音よ呼ぶことなりし。後竟に故實を未ひ。基まぢといふへを。何ちやうと呼ぶこととなりたり。かくての假を認て。真となすのみ。これを詳に解くとさる。町の書紀。孝徳大化二年正月詔曰。凡田。長三十步。廣十二步。爲段。十段爲町。段租稻正束二把。町租稻二十束。若山谷阻險。地遠人稀之處。隨便量置。同紀。白雉三年二月。又曰。凡田長三十步。爲段。十段爲町。段租稻一束半。町租稻十五束。今三田令曰。凡田。三十步。廣十二步。爲段。十段爲町。義解云。段。獲稻五十束。稻得米五升也。即於町者。須得五百束也。和名類聚鈔。田園類町。卷頭篇云。町他頂反。和名田區也。又周禮。地官。稻人。稻人掌稼下地。以澇蓄水。以防止水。註鄭玄云。澇防。以。春秋傳曰。町原坊規偃澇。以列舍水。列者非一道。以去水也。玄

が引ける所。左傳襄公の二十五年は出でたり。傳曰、爲掩書土田。度山林、爲藪澤、辨京陵、表淳鹵、數疆潦、規偃潒、町原防、是なり。正字通町字の下。及乘燭譚の、この條の杜註は、廣平曰原、防隄也、隄防間地、不得方正如井田。列爲小頃町、といへるを引きたり。又莊子養生云、彼且爲無町畦。亦與之爲無町畦。彼且爲無崖。亦與之爲無崖。町畦の疆界なり。又畔埒なり。故拾ををいふなり。此は町と區と同訓なるも、畔埒分別多かる義を取れるのみ。故に區々をまちくと讀ませたり。又說文卷三云、町、田踐處、从田、丁聲。他項反。又正字通町字下、引區種法云、一畝之中、地長十八丈方爲十町。町間分十四道、通人行。かゝれば、町段の制、和漢相似たり。坊は令義解東官職曰、東宮坊、東宮坊、作都管監三署六、大夫一人、掌吐納啓令。官人名帳考叙、宿直事、義解云、謂坊內諸司及官人考叙。其官人考叙者、坊司校定、更送中務省。又和名類聚鈔類名坊、房反、和名別屋也。又村坊也、字苑曰云々。坊名、教業坊、三條、左京、京、東、平、門、內、、豐射坊云々。以下載十二坊。於鈔可見也。拾芥鈔中禁中所々異名、坊、華芳、桂芳、坊、、桂芳、坊、、駐賦、掃、事物紀原、、白、至道元年、、十一月、詔改京城內外坊名、即今太平義和等、一百三十六是也。說文云、坊、邑里之名、坊土、方聲。古通用、陞、府長切、正字通、、坊與防有方房

二音。又曰、唐高宗龍朔中、改門下坊爲左春坊。左庶子爲左中護。改隋興書坊爲右春坊。右庶子爲右中護。又病坊言其間也。又曰、鷓鴣集曰、給孤長者、以黃金布地、故今俗謂善提坊、又商賈貿易之所。又坊記曰、道、辟、則坊與防、民之所不足者也。故君子禮以坊德、刑以防淫。これ坊の義、和漢異なることなり。おめる中禁より、坊は坊官僧坊の音のみ唱へしのみ。邑里街坊の坊をいふより、町の字を用ひたり。これ坊も町も、和名まちをなればなり。例せば、久本日本後紀延曆十六年、春正月壬寅、長岡京地一町、賜從四位下菅野朝臣真道以下。爾時多見たり。類聚國史、天長七年、冬十月乙丑、宮城内、御井町内、南方半町、給中務省廳地。續日本後紀、承和五年、三月壬申、左京二條二坊十六町二分之一。賜掌侍正五位下大和宿禰館子などおるし。町の字、今の町割間地におなじ。又續紀實武、天平十七年、春正月乙未、伊賀國真木山火、三四日不滅、延燒數百餘町云々。と書せし町は、町里の町なり。又續日本後紀、承和六年、春正月戊戌、織部司織手町火、夏四月丙寅、火于左馬寮國飼町。文德實錄、天安元年、八月辛卯、右近衛舍人町火。など書せし町は、共一坊の假字なり。前一録せし御井町の町、これとおなじ。又拾芥鈔中諸司所町、外記町、中御門北、大宮東二町、但、大舍人町云々、と、おるせしおなじ。大舍人町以下、二十餘町名を載せたり。これらの町は、舍の字を通りして見るべし。

し。いづれもまちと唱へて。音一呼ぶことなし。又扶桑略記村上天皇の巻。天曆七年癸丑。二月十二日壬戌。五刻。藍園町。有失火事。延及神祇官後廳屋。同書六條院の巻六條即白河院。承保三年丙辰。十月六日壬午。六角堂之町焼亡。然觀音寶殿。遂免餘災。と書せし町なり。今をまじく唱ふる町名とおなじ。又うつほ物語兼びうら屋やしなひ果の段。御車と。このみかどあり。今ひとまちなかりなり。中納言もおくりし給ふ。源氏物語木。これの二のまちのこりやすまき云々。といへる。まち二のまちと。今俗に。里數幾町。又幾町目などいふ。おなじ又賣人を町人と呼ぶこともふなり。古事談一。小松帝。親王之時。多借町人物。御即位後。各參内責申。仍以納殿物。併被返與云々。これらもまちびと唱へて。音よ讀むべからむ。今おやうよんと呼ぶ。又その一轉なり。よ町人。巫醫百工あり。浮浪遊民あり。しかれども町人といへば。なべて賣人の事とすなる。邑里街坊。坊賣貿易の所なればなり。又粟田關白道兼公を。町尻殿と唱へまうしき。江談一。町尻殿。道兼所憐危急之時云々。又日本紀略三條院。長和元年壬子。十二月四日丁卯。齋宮卜定。第一當子。内親王卜食。坐于太和守藤原輔尹六角町尻宅。これらの町尻も。讀みて坊後とすべし。又太平記。卷四十六。見えたる。參議清忠朝臣を。坊門宰相と唱へたり。この坊門の。まちと讀まむして。音よ唱ふるを

をもて。坊町。音訓新舊の差別あるよしを。しるべし。前よいへること。街坊といふ町なり。おへて坊の假字なれば。音よ唱ふるべし。あらぬ。後よその義を失ひて。をまじく音よ呼ぶをもて。字義はたかへり。とのみ思ふものあるか。坊町共。和名まちと。ひまみちの略辭なるべし。田區。猶街坊の間道のことし。こゝをもて坊町同訓なり。又靜齋隨筆引南史侯景傳云。善竹町南有好井云々。梁武帝ノ時ノ語言ナリ。街坊ノ名ヲ町ト云フコト。全ク出處ナキコトナリ。地名ニ町トイフコト。外ニ所見ナシ。稀ラコト事アル故ニ記シ置ク。是モ此方ノ某ノ町ト云ヘル子ハ異ナリ。竹町ハ竹藪ナド云フニ同クといへり。靜齋。名子深。靜齋其號。曾受三業於聖德太子。遂仕三任從大和國守。寶曆四年十一月十六日没。一書思。名子深。字叔仲。者非。杜篤傳。南鶴。鉤町。水劍強越。註云。鶴係也。鉤町西南夷也。水劍謂戈船將軍等。下水誅南越也。鉤町音劬換。といへり。國の名も某町といふ事。この外よ所見なし。これらに比し。いふ坊町。町とおなじからむ。皇國は言語を宗とすなれば。文字を奴として使ふこと多かり。ざるを唯字義のみ擧げて問難せば。彼柱膠して。瑟を鼓くてふ類なるべし。又舍の和名つばなり。和名類聚鈔居處。服陽舍在溫州。奈之豆保在溫州。淑景舍在照陽。岐利豆保在照陽。飛香舍在照陽。布知豆保在照陽。疑華舍在照陽。宇倍豆保在照陽。慶芳舍在照陽。加美奈利乃豆保在照陽。以輝塵。俗謂之雷鳴

壺。これら和訓をしらざれば。得讀みがたきものなり。故に照陽舎を梨壺。敬景舎を桐壺ともかゝれたり。凡この五舎の。前哉の花弁よりて名を得たり。しかれども文字の優美。俗ならざるを。擇まれたることのくのごとし。舎をつはと讀まするよし。爾雅。官中術。謂之壺。郭註。巷間問道。といへる。因れり。和訓つはと。圓つはよおしまとめたる義。よて。俗よつはふか。又つはくちなどいふよおまじ。花のつはみも。一圓よまどめたる貌をいふなり。夜のつはさうぞく。つはをりも準へてしるべし。つはの元采つはめるの略辭なれば。宮城の居處をつはねといふ。めとねと横音かよへばなり。うつは物語兼ひらよ。大将のおと。うつよりぞや。いとぞ思たあるふみか。中納言兼ひらよ。つはねよりなり云々。このよは梨壺をまじつはねといへり。これよりして。宮中の便殿を。みつはねと唱へ。女房の部屋をつはねといふなり。枕草子一の卷よ。御つはねよさおらんと。と辭じていぬれば。云々同卷三の卷よ。女房のつはねよよりて。おのが身のかしこまよしなど。とつはねをやりてと聞かするを云々。五の卷五の卷よ。清涼殿のまへのすのこより。まひ壺をさきよて。うへの御つはねへまゐりし程よ云々。尤の卷初の卷よ。ひふとひるうかたまわれ。壺まゐりて。おちらもあるまじなど。たびくめせば。このつはねあるは云々。つはね

あちじむ。そのつはねを賜はりてまる女房をいふなり。今いふ部屋親の類なるべし。同卷風のよ。かうじのつはねと云々。とさうと云々。ことさうらむしたらんやうよ。こまぐと吹き入れたること。あらかりつる風のしわざともおほえね。春曙鈔よ。格子のひまぐと。坪といふよ。といへれど。まじ藤守障子などよて。打ちかこみたる處を。やがて壺といへるなるべし。今も坊賣はくの店はよ増して。打ちかこみたる處あり。これらも藤子の壺といふべし。又内庭を。壺前哉といふ。つねの事なり。おなじき四の卷物のあはれしらすかよ。けふの雪山。つらせたまぬ所を。まじ。御まへのつはよもつくらせ給へり。云々といへる。つはよ。壺前哉なり。この段。李季の御まへ。藤原。又日本紀略藤原。昌泰二年己未六月四日丙寅。云々。盛物局秘。花不發。有子生。云々と書せし局も。壺前哉なり。又大鏡六。道隆公の卷よ。高内侍の事をいふ條よ。それらまことし。文者よて。御まへの作文よ。文たてまつられし。とよ。少々のをのこよまきりて。こと聞え侍りしか。さやうのをり召しけるよも。壺盤所のかたよりなまゐり給りて。弘徽殿の御つはねのかたよりとほりて。二間よなん條へたまひけるとこそえけ給りしか。古體よ侍るよ。云々といへり。かゝればつはね。何處よまれ。引さつはめる處をいふなり。定りたる後宮の名よとあらわかし。又つはね。局の字を

配當たるよし。正字通。局曹也。部分也。又拘也。促也。又曲身也。又棋局也といへり。男女のつばね。曹司部分の幾あり。又曲身棋局の貌あり。これよりて局の字をつばねと讀まするなるべし。説文卷十一。市居曰令。从山也。口象築也。始夜切。といへり。余字の形。おのづから屋のごとく壺に似たり。前輩の説。つばね。とのみするもの。帯をもどかぞ。つばねするなり。といへり。甚しき誣罔なり。又東鑑建久三年十一月五日の條。熊谷次郎直實。與天下權守直光。於幕府頼朝御前。武藏國熊谷入下。境相論裁許のとき。直實頻に憲斷の速を以ざるを憤り。怒道せする條。云。今直實。頻頻下問者也。御成敗之處。直光定可開肩。其上者。理運文書無要。稱不能左右。辭未終。卷調度文書等。投入御壺中。起座云々。といへる壺。辨状などを納れん料。公文所置かれたる。磁器に壺のやうに開ゆれども。さよあらむ。とは今之所なる。壺前裁をいふなるべし。さばれ。壺を政所置くことをさよあらむ。宋元通鑑宋太祖開寶六年秋八月。趙普云々。普嘗設大瓦壺於視事閣中。中外表疏。意不可者。投其中焚之。其多得諍。といへる大瓦壺。宰相。表疏の可らむともふものを納れん料。視事閣中置きたる壺なり。前より引きたる。御壺中云々の壺といふなむからぬ。唐山唐の壺中。文書を貯藏したる一證とすべし。

第十三地理

追加龍華寺全圖並江戸古圖略説

この巻の後半頁の餘紙ありしかば。第十富士歌等類の下に附け出だし。望嶽の圖中なる。駿河國有渡郡。龍華寺の全圖をなもゑがしつ。この圖成りて。余再おもふやう。彼處に遊べる人たちの。この圖なくともよくしれり。いまだ彼地を踏まざる人の。圖ありて説なくの惑いん。よりて聊亦筆記す。龍華寺の。一箇の草堂なり。和漢三才圖會卷六。駿河國の條下を検る。この寺なし。この新地なる故か。又させる寺院ならざれば載せざるか。いまだ詳ならむ。なほたづぬべし。寺内の光景の。圖を觀てしらん。堂の側なる。兩杖の蘇鐵の。その長一丈二尺むかりなるべし。又堂前なる。霸王樹も巨大なり。この二木。人の爲に稱せらる。寺地の前面。石をもて築き立てして。前江山あり。眺望の爲なるべし。中山道。榻鐵嶺なる。望湖堂に似たるやうなり。こゝより久能山の見えむ。寺のうしろの方。迥して小山連れり。久能山の又その背に當れりといふ。久能寺に近し。龍華寺より左に當れり。又清見寺と江を隔てたる。こなたに清水湊なり。湊より江畔を左に逸れば。東海道なる。江尻の驛に出つ。江尻は江後なり。なほ坊後を町尻といふが如し。このうち望嶽圖に漏らしゝもあり。合せ考ふべし。彼圖の解が藏書に一本あり。又ある人の寫真せられしを借り得

龍華寺



て北校し。なほよくしれる人。詠ひ究めつゝ畫きたる。華山子の苦心に成れり。僅に五
 十餘里なる處だもかくの如し。況。出羽の秋田なる島沼の。その地の人の口授に由れども。
 原本の絶えてなし。いまだその地を踏まわして。巨細に圖せん事。をさなき筆にて。いと
 く心もとなしとて。興繼の困じつゝ畫るころ。浅木氏附郵して。彼沼の圖一頁をおくら
 る。こゝに至りて。その畫稿を易ふる事三たびなり。僅にその真景を寫すことを得たり

第十江戸古圖略説追考

この條下。なほしるすべき事あるを。忘れたれば。こゝに追

書す。江戸の。和名鈔國所。武藏の郷名の中に見えぬ。東鑑卷一。治承四年。八月廿六日。江戸太郎

重長あり。卷廿一。建保元年。五月三日。和田義盛陣歿の條。江戸左衛門尉能範あり。太平記卷三。江戸速江守あり。

これらの人々。その地を名乗りたれば。江戸の地名に。なほふるくより唱へたるなるべし。
 始めの莊なりしや。とある人いへれど。しからじ。こゝに江村なり。初の磯。船の泊
 る處なれば。江戸と唱へたるなるべし。何となれば。淺草なる今戸船川戸今も船川戸と唱ふ。昔に漁
 戸なりけるよしなり。應仁文明のころまでも。今戸船川戸のあることを聞かざるに。城邑
 ならざればなり。かゝれば江戸今戸の戸。鳴戸由良の戸の戸の如く。みなと湊。とまりの略
 辭ならん。常陸の水戸もこれと同じ。みとみなとのなを省けり。水戸と書きたるに。湊及

港の假字なり。すべて戸と唱ふる地名。水邊ならぬ稀なり。伊勢の神戸かんべの官戸封戸くわんとはうこの戸なれば。これと同じからむ。鳥羽とりはの泊とまりのりを省けり。たま横音相通む。鳥羽と書けるの假字なり。又みなと場の略辭といはんも。由なきはあらむ。さばれ先案を。おだやかなりとすべし。山城の鳥羽も。右よおなじ。こそ野渡場やとばの義か。鳥羽は並びて。上下の出戸あり。皆淀川の上は在り。餘を準へてしるべし。菅籙倉志を考ふる。卷之二。荏柄天神えがらの條下は載せられし。江事記並よその序村邊靈彦撰。諸道德の詩句。よく江戸の義は稱へり。記の。文明八年。丙申八月。湘山得公の撰なり。靈彦序云。平蕪茵布アシトチノ如キ。一目千里。野與海接。海與天連者。是皆公几案間一物耳。以故軒之南名靜勝。東名泊船俗に傳ふ道灌の舟繋松。うの庭にあらしむといへども。泊船亭を記いふ歟。村菴詩云。高舫似自平蕪過。漁火如從速樹來。景莖詩云。風帆多少載詩去。吹雪士峯暗墮江。その他。臨江の詠ならぬもなし。かゝれば江戸の戸のみなと。又とまりのとなるべし。文明以往。城邑ならざりし日の。江戸と唱へたる處。今戸花川戸を見て推してからる。しかるは二百年來大江戸の繁昌なる。漢土長安の萬戸といふとも。これよますことあらじかし。顧ふは今の大江戸の昔の江戸として。むかしの江戸はあらむ。昔の江戸は生れをじて。今の大江戸は生れ。むかしの時よあらむをじて。今の御時よあへり分を守り足ることを思へば。微軀よあ

まれる福よぞありける

附録

小里十二時

小里の十二時、此の所、
十二時、此の所、
十二時、此の所、

石川雅望 著

かりはもれにのとり。在五の物語はまるしつれたり。あだちのはらのくろ塚よと。無盛
 朝臣どよみたある。大江戸の北はあたりて。然るものゝま集だくところあり。よしそらのさ
 と、いよぶめり。げよつあがぬ身男のよるべきだめを。あくがれまどふたこれを男枕ひま
 ゆふたりありと。いでやかゝるたのしき所はあどびて。まかきどちの女おまごゝろ
 よ。家路は歸らんこともとされて。芥の柄もこゝよくたいつべし。の御佛のまみ給へ
 る極樂の國を。かけて聞えんのかた女じけなけれど。あそびが女ともがらよも。猶九この品の
 けちめありて。その志あさましくよとられたり。さるを下品げねんといへどもたりぬべしな
 どいふ。よくまいたる人の詞なるべくや

卯時

あけぐれの空のおがくしきよ。かどのとのご門くとなる。まらうどのかへるよや
 あらん。あそびども門。なれたるさぬのまそひまらへげて。あわたしくとしりきて。とひ

りのくちよたゝをみたちておくりませ。ときてまたしうせるの。ひきつれて中やどりの家
 よいたりて酒くみかとし。かゆまゝりなどして。さて大門のもとよいたりてとめるめり。
 ねくたれのあさが不見るのひありなど。おもふも心のあしよやあらん。やうくあけゆ
 くやど。こゝらの人ども。いろくの夜どもきたるが。こまませよいできて。いそぎゆくあ
 しもと。ねぐらををあるゝからまよもおとらむ。竹ごしかくものゝ。あくびうちして。あま
 たならびあたる。こゝろもとなげなり。こゝよ柳ひともとたてり。見へりの柳とぞよぶ
 なる。糸よよるものといなしよあど。うちあがむる人もありぬべし。門のうちよ女むら五
 七人。物よかくれてたゝをみせり。さるたのめし人の。よそ人ようつろひぬるをよくみ
 て。そのむくいせんとしてまたまつなりけり。男の斯うとだよまらねば。のどくとあゆみ
 くるを。ふいよとらくといできて。ひまとらへてゐてゆく。ゆかじとをまへど。あまたし
 てまたゝるよつかみりゝりぬれば。まべなくて手まどひしつゝ。おめくとなりてひか
 れつゝゆく。ゆまつまてゐるよかまらん。おがつかあし

辰時

ものこふ法師むら。うちつれてそちくといびつゝ入りもてく。むづろしげなる桶さし

よあひて。またなげなる男どものいりくるも見ゆ。物ぬふ女の。ちかきとたりよまめるが。
 つゝみひきさげてくるもあり。髪つがぬる男よや。たまきひきゆひて。いかめしなくしげ
 ひきさげて。いそがしげよとしりあるく。とかきあそびども。猶よへのまゝよて。夢路よ
 とあしもやめぬよや。いびきとあやかよるきて。あらぬねごとをさへいふなる。夜ひと
 よかたらひあかしてこうむけるよや。けさも猶かへらで。やがてねふせるまらうどもあ
 るべし。男どもは部屋々々のさらなり。ほそどの。くりやのいたじきなど。かいとこのごひ
 なです。大門ををなれて。ながまつゝみあり。その下よいさゝかのまちあるを。くさく長屋
 といふ。こしかくものどものまみどころなり。今戸橋のあたりより。ふなをさの家ども。軒
 をならべてたてり。此のこたりや。いづれもよのつねのごとく。このほどあさげなどかし
 ぐめり

巳時

今ぞ。家の内やうくおき出でゝのゝしりさあぐ。海よとりたるもの。山よほりたる物。い
 づくよりもてくるよる。よなひきてあさなふ。家あるじうるしの板よ。よへのまらうどの
 敷まるしたるをとり出でゝ。物よかきつく。めりこなたよるて。ひばり草くゆらしてつゝ。何

くれのとども。人よをしへてまかなたま。からうじてあそびどもおき出でて。ひとこ
 ろよこぞりゐて。あさげくひて。さてゆぶね答解入りひたりて。口々さへづりあへり。さるあ
 またあるあそびどもおれば。心のおもむけもおのゝこととなり。物まめやかよつ
 ましく。こめいたるもあり。又もてひがめたることのみいひて。おどましくさがなきもお
 ほかり。かたみ互よゆぶねの口よかままりゐて。あかひさながしつゝいへることよ。つかさ
 のことなん。けさねいといざたなかりし。思ふ人よこそあひ給ひつらめといへば。あらむ。
 にかい男なるが。よろづさしきまぐいて。詞おほく無禮なめげなるがよくければ。まうさしむけ
 てねて。あかしたりきといらふ。まろがもとなる。鼻ひらめよ。ひたひされて。あま朝くそき
 へ花やゐなる老人なりき。されど老らかよもてなし。あへしらひてかへし。人がらの
 よごとしくたのもしげなればぞかじといひて。たかやかよとらひて。ゆかたびらなきが
 しろよりちかけて。つゝむべき所もおほひだよせむ。立ちとしりつゝいぬる。いとむうぞ
 くなり。又いりくるもおなじをぢなるまうらう言ごとのみいふめり。いとかしかまし

午時

おくまりたるかたのさうし部いりゐて。おのゝけさうし。みがささる。このまら夜び

つ。ながもちようちたるのなぐなどみがく。物のふたよ花の枝葉こちたくつみもてきて。部
 屋ごとの花がめよさしていぬる。花うるをのこなるべし。べよ。しろいもの。もとゆひ。
 くし。扇など。いとふきよ箱異いれて。もてきてうる人あり。くましよやあらん。とやうな
 るいろの衣異きて。のちもちうべ異しさが。たくなるつばねにいらさぬ。屏風のうちよ。
 色異。さを異まろくあをみおとろへたる女の。ほそき紐してひたひのあたりひきゆひて
 ふしをり。くましちひさき綿異香薬といふものをぬりつけて。屏風のうちよいりてふた
 び出来て。ことよもあらじなどいひて。ま異おさうちしての入りぬ。いろなるやまひよ
 ろあらん。いとほしげなり。としらよよりゐて文のく人あり。手おしやあしや。さなが
 らみよのうごめくやう異なしたる。まらうどのもとよりおこせたる文よ。う
 ちひらさよみ見て。ものこまけし異まじりひさあげて。何事いふぞ。まこなりや。のゝる
 こと誰のいあらんなど。ことだるよふづく異みいへる。何ごとよのあらねど。おもふよた
 がふことよこそあらめと。おんそらいたし

未時

さとより。めおやのとぶらひきて。まきみとらひみ物がたりなどを。げよみるのひある女

子を。かゝる所よしなち置きて。心のやみのとるくべきかたもあらじかし。此のころは
 ひより。あそびどもかうしの間よ出でゝならぶ。げそうなればかいまみする人もなし。た
 る田舎人なかうどのこち無骨くしさが。たちめぐらひつゝ。めを大きよなしてうかぶ。うちよ
 の昇丸石なとり。貝あこせなどしてあそぶ。ふたつむかひのちごのおかしげなるをひざよま
 えて。うつくしみあそむせ。のいなでつゝらうたがる。あやしき好えせ法師をまがきのとよ
 よびいれて。ゆめがたりし。うらゐたなどゝふ。ひさしくもなりよけるのなとうちまじぬ
 る。此のゆふぐれのころもとなきよやあらん。又のこへよ打ちまめりて。心のうらぞ
 まさしりりけるといふ。まさめられぬる人なるべし。との方よのそばまいたる箱ど
 もよあひつゞけてくむりありく。さるゝよるのものあたらしうてうじたるいとひごと
 へて。あゝることゝまるありけり。大方ふま衆まなどの打ち志のびてとりあくし。物をべき
 をもていで殿けくしくもてなき。例よのそりたるならしよあん

申時

ゆふひ西よかたぶくころ。おのがじ直路さうぞまつくろひて。あら相應と引きつれてねり出で
 たる。此の世の人との見えむ。柳櫻山吹など折からのいろあひつゞ衆くしく。ぬひものぞ

うが眼んなど。めもか々やくむかりよて。すそながうひきたるう直路のざども。いみじうなまめ
 いたり。この大門よりのた直路ぢよて中の町とぞよぶめる。家ごとよすだれかけて。軒よ
 の花色よそめたる布ひきわたしたり。いもうとだつ人の。かたよかゝりてすのうちなる
 人よ物うちいひて。や徐をら隣のかたへあゆみゆくさまいとどかなり。このよある家ど
 もの。あそびがもとよかゝづらふ人の。しむしのほどの中やどりとして。打ちやすらふ所と
 なん。やよひのころの。花の木ども所袂せううゑわたしたれば。右ひだりのたかどのをかけ
 て。しら雲のかゝらぬ軒なし。まらうど端おほしきが。ふところ大きやかよなして。こ端じゐ
 してあり。あそび二三人ちひさきわらふたりをひゐたり。うたうたふ女ども四人むか
 り。たかやかよ打ちわらひ酒し元ノマ、龍ひそし瓶そ子まきあぐ。まらうどあるじよさかつかさした
 るを。いたゞきをるほど。女ひさきしてへいじとりてつぐよ。酒したるりてひぎのあたり
 ぬれぬ。あるじあわてゝ紙もてかひのどひつゝ。じりめよかけていへる。ましがあれよ
 けさ愚うじて。しむく文おこせつるをうけひかでありしを。ねたことかゝることゝし
 つるなめり。されどまことよ七よくしとは思七な七ざらまこといへば。女いかゞ。あが君が
 ねとおそたのみ奉れといひて笑ふ。あるじまらうどよむかひて。かれのしんじちのすみ

かと定めて侍れど。本性のひがみて。みぞか男をのみまうけてかたらひ侍りといへば。女
 むら手打ちたゞまで笑ふ。かゝるよむかひなるすのうちより。わらわのくろきあしたと
 さたるが。櫻のえだ一もと手よりちさゞびていりきぬ。まらうどよそひをるあそびがま
 へよ。ついであがおもとの聞ゆなり。此の一枝花もかかしう侍れむ。たいまつるよなん。
 こよひの櫻田なる御心しりのわたらせ給うけるよし。ありならうれしうこそおぼすら
 め。うらやましくこそ思ふ給へらるれといふを。まらうどのほのさけど。しらをがほつく
 るもかかし。何事か。こまやかよいらんしてよく聞えてよといへむ。わらわの足むやまた
 ちていぬ。その隣なるら。すだれおろしたればよくもみえねど。男どちならびるて。から聲
 ようたふ。つねさく鳥もあか〜と〜しをりあげたる糸のしらべもほそく聞えて。かみ
 さびぬることわづかひもやうありげなり

酉時

たそがれのころ。わらわの格子の内よたちて。さしむかひたる家のあきびとをよびて物
 かふとして。むかひなる人々とこまあげてよぶもうつくしげなり。又おなじやうなるわら
 わのあかつきたる夜きて。つゞみよつゞみたるもの。あきむきみてこしる何事するよ

か。この伊勢のごのせよかそりゆくとよみけんやうのわぎするよやあらん。をのこのか
 うしのとよたゞをみて。内なる女と打ちさゞやくあり。かたみよ山鳥の心ちやすらんか
 し。中のまよ伊勢のかほん神をまつれる所あり。しも男の来て鈴をうちならせば。あそび
 らのみあるかざり。格子の間よゆきてゐならぶ。かの男のおまへのみあかしの物よう
 つして。格子の間の油つぎよともしつく。横座よすわりたるらやごとまほほどなるべし。
 壁よの鳳といふ鳥をゑがきておしたり。二の町なる女むらわ。此の壁よせなかおしつゝ
 群集
 れしこりをり。まがきのさけよならびたるら。それよりもおとりのかたよ。この女むら
 すがよきたかうひさならず。大路よのこらの人。さまよひて格子のひまよりのぞく。あ
 かしみつよつともしつらねて。男の袖をひかへて。女むら打ちまじりそめさきうどま
 て入りくるなど。よごごしきこといへむさらなり

戌時

大きなるすてまやうの物うちかづきてもてく。いづこの峯の松よかあらん。かげともた
 のむむかりなるを。ひきりて中よすゑたり。人の心の秋風ようつろせせじとのいとひ
 ごとよや。たぬどのよらざうしどもあまたへだて〜つくりみがきてあり。つしよかひな

どでいしてまきあしたり。中やどりが。ともしびききよたてゝまらうどらのほりてく。男
 たかつきもて出でゝぬかづく。しばしありて酔ひの香高うかをりて。あそびどもか々や
 ぎ出でぬ。たゞ生きてきたらく辨才天女の。こゝよあらそれ給へるよやとうちおどろか
 る。まらうどさかつかとりてあそびよさす。此のあひだのさほふいとつゝましくうるこ
 しきや。とじめてのげざんなればなるべし。かいひく女など出でてうたひなどすべし。
 また入り来るより。女どものかざり出でてきて。あざなよやあらん。今めかしき名をよびた
 てゝわらひそほれて。うちとけかたらふ。月ごろさかよふまらうどよやあらん。こゝな
 るしも男をさしてぎふとよびつけたる。いかなるゆゑよかあらん。髪をつれたる女の
 まがこくろきが。としつかたよ曹司しめてをるをやりてとはよぶなり。それのあそびら
 がうへよ心をやりてよろづあつかふめれば。さる名をむおほせけるよや

夷時

ふすまの三つ五つ。締あつらかよつくりて。大きなるひたゝれめく物さへまうけおまつ。
 いづれもくれなるのよしきなれば。さながらたつたの山の秋よあへらんやうなり。うゑ
 山ぶみなるまらうど。ひとりふせりて今やこんをらんと。あやひうちしてまつめり。さ

れどむごよこねだ。いたづらいねなどうめきつゝふしをり。とびかりすぐしてあしたと
 すなり。そゝやと思ひてそらねしてをれば。しづかよ入りきて。屏風をおしあけて。ね給
 ひぬるかといふ聲をづかしげなり。猶そらねしてをれば。あなたよ出でゝともし火かゝ
 げ。覗とり出でゝ文かく。やゝひきしくためらふほど。千とせをすぐすこゝちぞするや。里
 をばかれむとこそむかしの人もよみたれ。思ひぐまなき人もありけりなど思ふも。うち
 出でねばたれかかしらん。いでやたからよかへて戀する人だよ。斯うやすからぬこゝろ
 いられぬすなり。さむ思ふよかなぬ物の世の中ぞかし。あな。かたをらいたしや。あなた
 よ。さだ過ぎたる女の聲して。宵まどひのあらぬをしかりさいなむ。格子のかたのやう
 く人むくなよなりて。むげよわかきものゝみのこりゐて。長き夜をわびかほなり

子時

つゞみをうつこと。子午のこゝのつとこそ。延喜の式よ記したれ。さるをこゝもとよて
 ぬ。そうし木をよつぞうつなる。此のおとよあはせて。かうしのうちなるあそびども。そら
 くとたちていぬ。此のとさくるゝ戸をさし。かうしうちなるへだてのさうじをもちあ
 るよなん。このおとなひ。こなたかなたひとつ時なれむ。いみじくひまきあひて。かみのな

るよやとさへおどろかれぬ。くりやよてり。毒子をさしき。勝おふし。高たかつきのたぐひ。あらひのごひてとりをさめなす。まらうどせぬ女をら。あらななどみなふしどよいりてふす。たゞ番の男のみひとりおさめて。ときく興と口と見ゆかりて。とうし木うちありく。大路よのかを杖のやうなるものふりならしつ。火あやふしなどよびつゝすぎゆく。さてはら接とりのめくらほうし。そばむぎうる男のこゑのみ大路のかたよ聞えて。ゆまかふ人もをさく見えをなりぬ

丑時

かみしもみなしづまりぬ。雲井をわたるかりの聲も。所がらよやあれ聞きなきる。から猫のねうくとなくよもたれかのおさあかすべくとぞおぼゆる。されど猫ねもやらで。夜ひとようちかたらふ人もあり。あるは鹽屋のけぶり風よなびくをうらみ。又山川のあさき瀬をくねるなどとりくなり。あやよくよまらうどの。二三人さあひたる。せんすべなけれど。例のいもうとだつ人を出だしてあへしらす。おもへどえこそなど。よくきことをさへいふゆり。あるは熊野の神よちかひて。せいし血をあえてとらせつるを。たがまことをかたよろこぶ男もあるを。たけなる髪をおしまりてやれるを。うれしと

だよもみえざるよや。かづらなぶらよたえぬるもみえたる。たやうよりぬなかよやしなそれて苦だみてものいふ男の。よなかともいそを手うちたよきて。をのこどもとく来といふ聲いとむくし。番の男きてかこまれぬ。おだけたかうなして。さけびい入る。何がしこそとのみうちよありても。各あるうとりなれ。しかるよこよひのみじき恥見たり。まづ此のかたきとするさぶるこいづちいよたる。質よりまちつけをれど。ふとかげをだよ見せき。こまもろこしよりわたせる名玉のごとく。われをばあたあつきふままよくみおきて。とりいろふものもなし。よくしともよくし。これをもしのぶべくんむいづれをかしのぶべからざらん。此の家のあるじこよよめてこ。たいめしていふまこととありと。ひぢもちいかめしくしてのしる。男たいくじ事。しむしのとめさせ給へ。おもとは開ゆべくといひてたちてゆく。たのれいづくへかよがる。しや。かしらうちありてんといひさま。たちかゝるほどよ。あそび来てなよごとをかの給ふ。けののほりてくるしければ。まむしかこよてつくろふとて。うつぶしふして侍り。さなをらたよせ給ひそといひつゝ。手を袖よいれて。かたのほどいさよかつみたれば。さむかりたけくしくをやりたるもの。よそのよなへくと折れて。あみがほつくりて。ひたひよ手をあてよ。

づらひ給へる事なをらで申しなり。ゆるい給へといふも辨ふるへて。いとあまへたるおもふちなり。さてひぬれて屏風のうちよいぬ。あそれやうくさまくくなる心々。おろかなる筆よぬかきとりがたくや

寅時

まくらがみよひぐく鐘のおと。あさくさでらのよやなどたどるほどよ。例の中やどりがもとなる男の。あかじともして屏風のそぎまより顔さしいれて御むかへよまうできつといふ。まださよいそがせ給ふべしやと。ふしながらいふ聲。いとねぶたげなり。いなつとめてなよがしどのよみたちよ。ようありてめさせ給ふなり。おそくびびんなからんといひつゝおき出づれば。みたちよ出でさせたまへんより。此の方の御いさめこそおそろしうおぼせらめ。とくいそがせ給へなといふも。いとねたげねなるありめなり。とかくしてほそどのよいたじきふみならしつゝ出でいぬ。まろむねいたければおくり聞えむといへば。ゆゝしき事。湯まありてそやうさ英わび給へなど打ち見かへりつゝいふも。あさくさあらぬころなるべし

「そみだ川をみよびぬらしうかれめのうきせながらよながらふる身の（北里十二時終）

明治廿四年一月十九日印刷
同 年一月二十日出版

版權所有

校訂者 編輯者

佐藤 定久

東京小石川區西江戸川町一番地

同

富山 健

同 牛込區築土八幡町二十三番地

發行者

吉川 半七

同 京橋區南傳馬町一丁目十二番地

關西大 賣捌所

松村 九兵衛

大阪南區心齋橋南一丁目

發賣人

林 平治郎

東京日本橋區箱屋町八番地

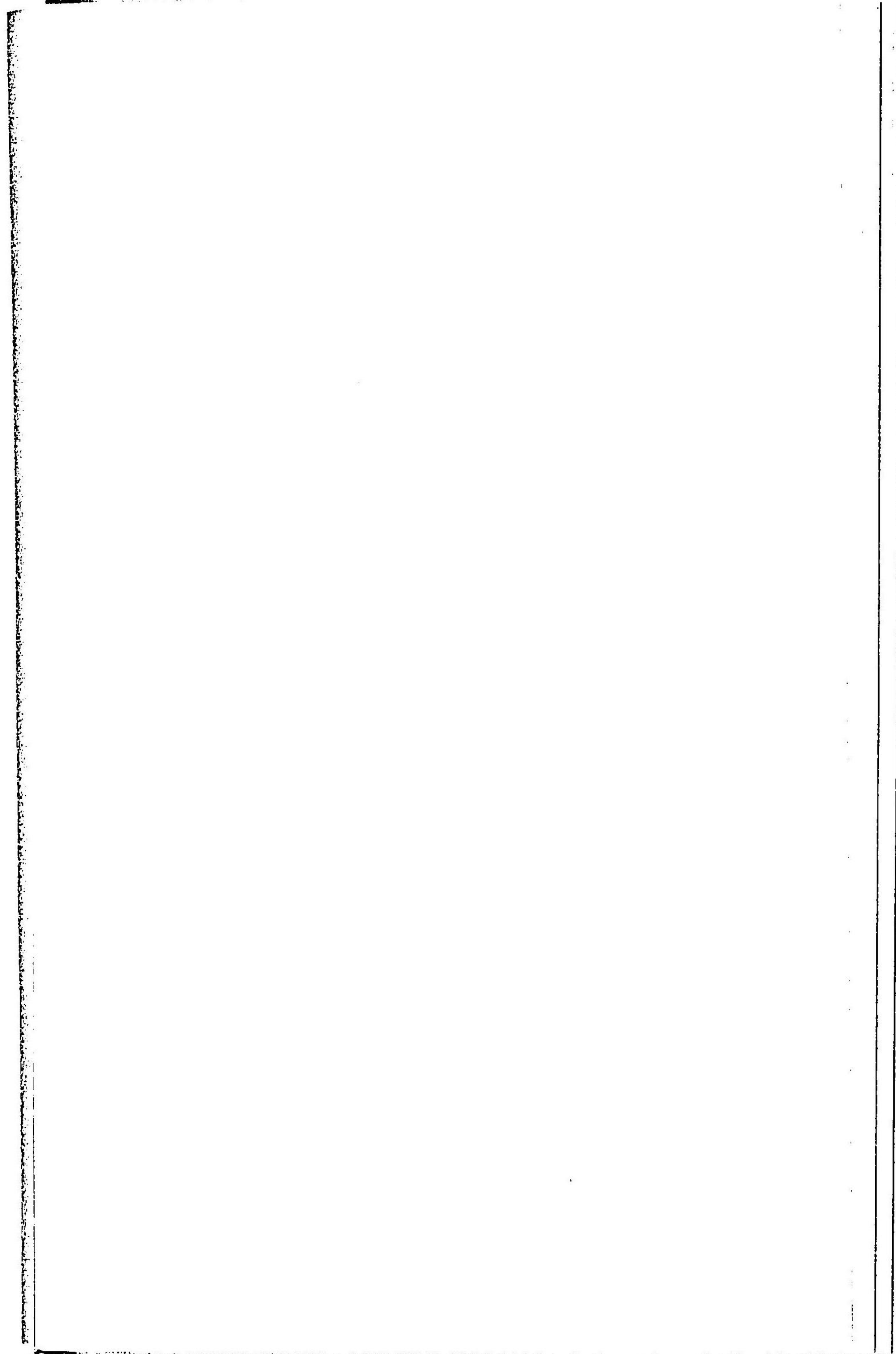
印刷所

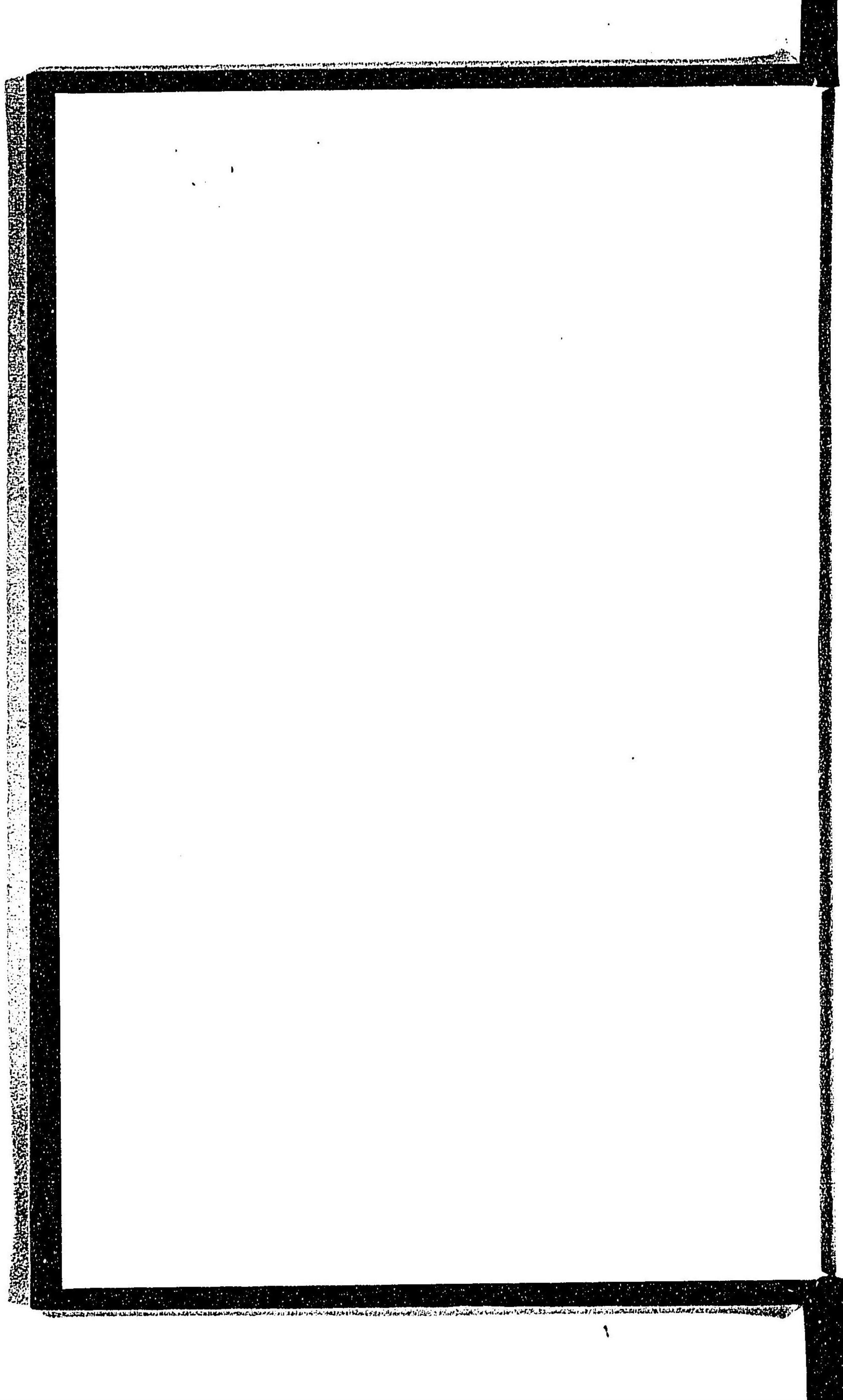
必昇社

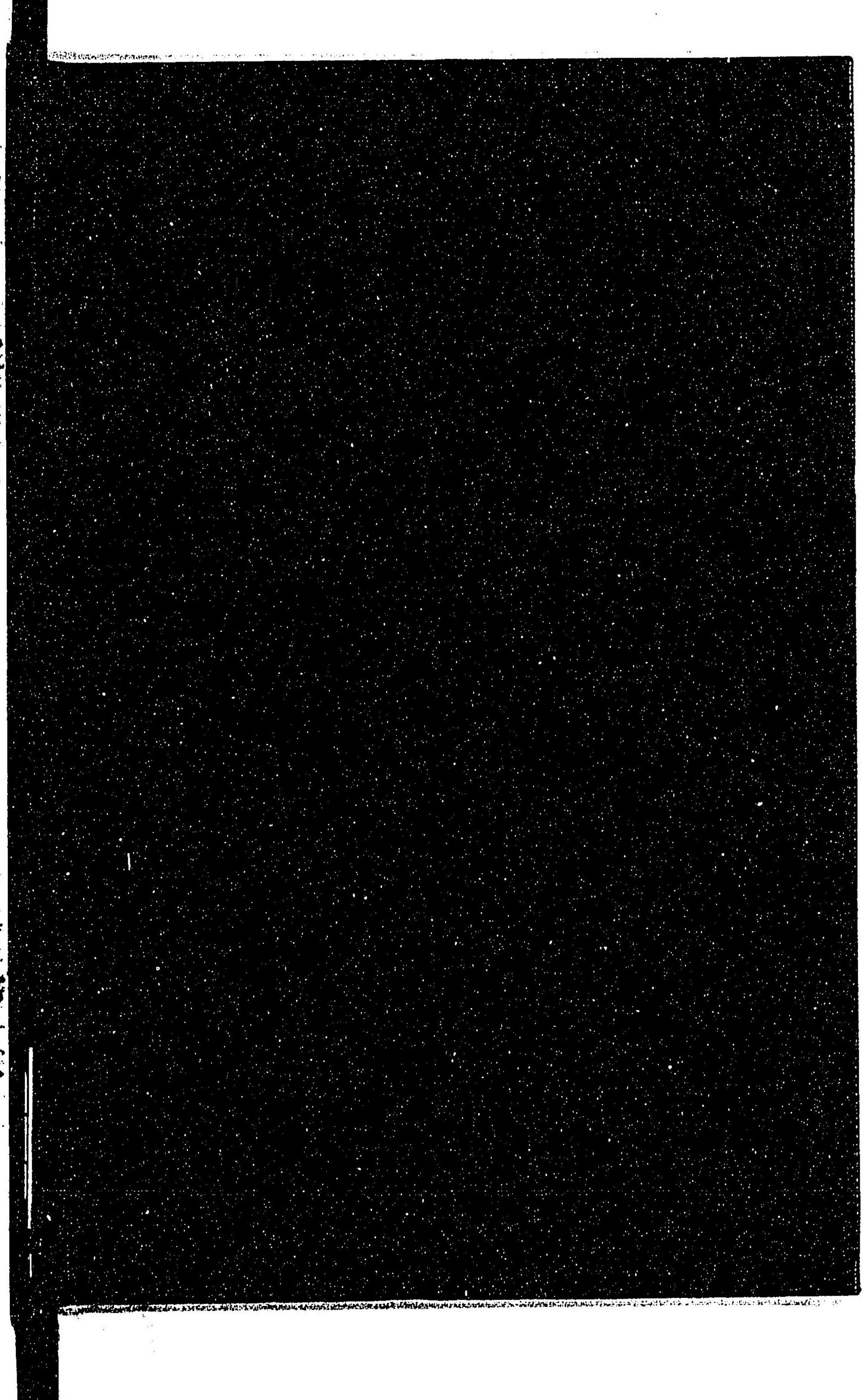
東京々橋區箱屋町九番地

各府縣發賣所

同	同	同	新	石	同	靜	同	愛	岐	飛	佐	神	熊	同	京	同	同	同	大	同	同	同	東
長	長	水	新	川	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
岡	岡	原	瀨	澤	掛	新	同	名	米	高	賀	相	本	新	河	心	備	久	北	小	神	同	同
		市	市		川	通	一	古	屋	山	山	橋	二	二	原	橋	橋	太	太	石	石	同	同
					一	一	一	本	本	町	町	東	丁	條	下	南	町	郎	郎	川	川	一	一
					日	日	日	町	町				目	下			町	町	町	町	町	町	町
上	目	西	林	近	三	勝	川	片	三	枅	河	熊	長	大	便	嵩	梅	三	柳	青	中	大	北
田	黑	村	田	原	見	瀨	野	瀨	浦	屋	谷	谷	崎	黑	利	山	木	原	山	山	西	倉	善
屋	十	六	富	太	甚	儀	代	四	源	兵	壯	榮	次	書	書	龜	佐	兵	清	邦	孫	孫	書
治	平	郎	吉	平	藏	助	助	郎	助	衛	助	堂	郎	舖	堂	堂	七	助	衛	吉	太	衛	店
同	同	同	千	同	同	同	茨	枅	福	同	北	秋	山	岩	同	同	宮	群	同	山	同	同	長
鶴	千	東	葉	古	石	土	城	水	宇	島	海	田	形	手	同	同	城	馬	同	梨	同	同	同
舞	葉	金	原	河	岡	浦	水	市	都	福	道	大	八	盛	大	同	仙	前	同	甲	小	小	長
																	臺	橋	八	府	諸	諸	野
																	國	本	日	柳	本	本	善
																	分	町	町	町	町	町	光
																	町						寺
																							前
長	多	多	朝	高	高	間	川	正	萱	石	魁	本	五	便	正	高	金	煥	五	徵	小	水	西
峯	田	田	野	木	野	原	又	々	間	塚	文	間	十	益	々	藤	港	乎	明	古	山	澤	澤
書	屋	屋	利	文	平	右	銀	々	々	左	右	之	嵐	益	々	書	々	々	々	古	佐	琴	喜
支	支	本	兵	正	清	右	衛	々	々	右	男	之	太	益	々	書	々	々	々	古	傳	太	太
店	店	店	衛	堂	助	門	藏	堂	太	藏	社	助	門	堂	堂	店	堂	堂	堂	堂	次	堂	郎







Q14.5
H997
I

